

シヴァ教再認識派における 36 原理

川 尻 洋 平

0. はじめに シヴァ教では、二元論の伝統に属するシャイヴァ・シッターンタであれ、一元論の伝統に属するトリカおよびそのトリカに哲学的神学的基盤を与えた再認識派であれ、サーンキヤの 25 原理にシヴァ教独自の 11 原理を加えた 36 原理がたてられることはよく知られている。シヴァ教においては、25 番目の原理である個我 (*puruṣa*) は、純粋な観照者としてではなく、行為の主体として捉えられる¹⁾。この個我は、主宰神シヴァが非限定的な認識主体であるのに対して、限定的な認識主体である。この個我に限定を与えているものが、制限 (*niyati*)、時間 (*kāla*)、執着 (*rāga*)、限定された知 (*vidyā*)、限定された行為能力 (*kalā*) という五つの原理である。五つの鎧 (*pañcakaṇṭuka*) と呼ばれるこれら五つの原理の原因がマーヤー原理である。マーヤーは、一元論においては真実を隠蔽 (*tirodhāna*) する幻影のことであり、二元論においては世界の質料因である。マーヤー原理より上位にくる 32 番目から 36 番目の五原理は、絶対者であるシヴァの内部展開であり、マーヤー以下の原理が不浄道 (*aśuddhādhvan*) を構成するのに対して、清浄道 (*śuddhādhvan*) を構成する。まず個我の限定された知に対して全知の原理である清浄知 (*śuddhavidyā*) がマーヤー原理の上位にくる。同様に、個我の限定された行為能力に対して全能の原理である主宰神 (*īśvara*) という原理が清浄知の上位にくる。これら両者の上位原理が、34 番目の永遠のシヴァ (*sadāśiva*)²⁾ という原理である。全知全能という二つの属性の基体である永遠のシヴァは、静的なものであり、普通は死体 (*mahāpreta*) として表象され、ヴェーダーンタ学派が最高原理とみなしたブラフマンに相当する。この上位に、シャクティとシヴァという二つの原理がある。シヴァとシャクティは、ここでは別々の原理としてたてられているが、シャクティはシヴァの活動の側面を表しており、しばしば同一視される。

本稿の目的は、原理に関するシヴァ教再認識派の見解を明らかにし、同派の 36 原理解釈の特質を指摘することである。

1. 「道」(adhvan) この 36 原理は、シヴァ教において、シヴァに至るための六つの「道」(adhvan) の一つとして挙げられる。六つの道の内、アビナヴァグプタによれば、36 原理が主要なものとされる。シヴァ教では、36 原理の間には因果関係があり、下位の原理は上位の原理の結果である。したがって、36 原理は、上位から下位の原理へ辿る場合に世界創造の過程とみなされ、一方で、下位から上位の原理へと辿る場合には世界帰滅の過程とみなされる。下位の原理を浄化し上位の原理に還元することによって、最終的に個我にある束縛を取り除く。それによって解脱が可能になる。そして、下位の原理から浄化していく手段として、師によるディークシャーや知などが用いられるのである³⁾。ここで注記されるべきは、アビナヴァグプタによれば、‘adhvan’ という語は二元論では「到達されるべき段階」を意味するが、一元論では、「享受されるべき対象」を意味するということである⁴⁾。二元論では、シヴァ原理こそが到達されるべき対象であるのに対して、一元論では、あらゆる原理が自己自身と同定されるからである。

2. 「方法」の体系 それでは、36 原理の体系は、シヴァ一元論の救済論の体系においてどのような位置を占めるのであろうか。上述の「道」の体系とは別に、シヴァに至る手段として説かれていたものに「方法」(upāya) の体系がある。シヴァ教のアーガマである『マーリニーヴィジャヤウッタラタントラ』では、三つの方法、すなわち「シヴァの方法」(śāmbhava-upāya), 「能力の方法」(śākta-upāya), 「個我の方法」(āṇava-upāya) が簡潔に言及されている⁵⁾。アビナヴァグプタは、一元論的伝統のトリカ派の体系をまとめた『タントラ・アーローカ』において、これら三つの方法の上に「僅かな方法」(anupāya) を付け加えた。「僅かな方法」とは、師の一言、一連の議論、あるいは聖典に対する信頼によって頓悟する方法である。再認識派の論書の学習は、伝統的にこの「僅かな方法」に相当する。他方、36 原理については、『タントラ・アーローカ』において、「シヴァの方法」の補助手段として、また「個我の方法」を説明する第 5 章以降の第 9 章で、詳述されていることは注意されるべきである。

3. 三原理 以上のようにシヴァ一元論の体系に位置づけられる 36 原理とは別に、シャイヴァ・シッダーンタでは、獣 (paśu), 主 (pati), 束縛 (pāśa) という三原理がたてられる。そしてこの三原理こそが主要なものであり、根本的なものである⁶⁾。これら三原理は、世界という束縛によって限定された獣である個我を、束縛を取り除くことによって主であるシヴァが解き放つという関係にある。36 原理は、このうち世界という束縛について述べたものである。注意されなければ

ならないのは、三原理はそれぞれ独立した原理であり、たとえ個我が束縛を取り除かれたとしてもシヴァに帰滅するのではなく、あくまでシヴァと同等のものになるということである⁷⁾。シヴァと個我との間に隔絶を認めるところに、シャイヴァ・シッダーンタが二元論といわれる理由がある。一方で、一元論の伝統では、一切はシヴァに還元され、シヴァと個我の間には本質的同一性がある。

4. 原理 (tattva) それでは、シヴァ教において「原理」(tattva)が、どのようなものとみなされているのか。シャイヴァ・シッダーンタの『マタンガパーラメーシュヴァラーガマ』では、様々な特徴が言及されている。それらの特徴は、二元論の伝統に属する学匠ラーマカンタの注釈によれば、次のとおりである。まず、原理とは、実在 (vastu) であり、属性基体 (dharmin) である。さらに、別の事物の拠り所でもある。変様したとしても、本質を失わず、帰滅に至るまで存続するものである⁸⁾。そして、世界に遍満したものであり、それ自体は他の原理に支配されないものである⁹⁾。

4.1. ウトパラデーヴァの解釈 ウトパラデーヴァは、再認識派の創始者ソーマナンダの『シヴァ・ドリシュティ』に対する注釈において、原理を「世界の多様性を展開することができるもの」(viśvaprapañcatananakṣamam)と述べ、さらにシヴァによって生み出された結果とみなしている。これに関して、さらに注目されるべきは、ウトパラデーヴァは、身体などが創造主から直接生み出されるのではなく、諸原理を通じて展開されるものであると述べていることである¹⁰⁾。このように、ウトパラデーヴァは、シヴァの結果である原理を世界創造の手段とみなしている¹¹⁾。

4.2. アビナヴァグプタの解釈 アビナヴァグプタは、上述の『マタンガパーラメーシュヴァラーガマ』に基づいて、原理を普遍 (sāmānya) に似たものとして解釈する¹²⁾。このことは、再認識に関する論書において明瞭に述べられている。

この「我々の体系」では、その性質が原理 (tattva) である。したがって、[原理とは] 個物を本質とする集合を「同一の」集合にする根拠である普遍と言われる。例えば、土塊や石ころや肉体などにとっての地、川や海や湖や大洋にとっての水というように。そのことは聖『マタンガ』というアーガマにおいて述べられている。(ĪPVV III, p.264)

アビナヴァグプタによれば、原理は普遍 (sāmānya) と呼ばれるものであり¹³⁾、個々に異なる個物の集まりを同種のものにする根拠である。36 原理とは、山や木という個物にある地という普遍、あるいは川や海という個物にある水という普遍として理解されている。

一方で、アビナヴァグプタは普遍が原理と言われる根拠について次のように述べる。

顕現を本質とする普遍、それは威力 (vibhava) として展開される (tanyate) から、その [普遍] は原理といわれる。そして壺などは他のものとして展開されない。実に、その [壺など] は、地などが混合したものとして、すなわち相互に遍満することと分化によって多様なものとして存立するから、威力といわれる。(ĪPVV II, pp.148-9)

ここで、アビナヴァグプタは「原理」(tattva) という語が語源的に動詞語根 √tan (「展開する」) に由来するものであることを示している¹⁴⁾。「威力」(vibhava) とは、身体や世界などといった形で多様なものとして存立しているものである。したがって、普遍は、多様な事物として展開されることに基づいて、原理と呼ばれるのである。個物である壺などは、地原理などが展開した結果であり、地原理などの混合体である。以上のようなアビナヴァグプタの派生的分析と語源的分析を踏襲して、クシェーマラージャは、「その性質が、展開することに基づいて、原理である」(tasya bhāvas tananāt tattvam) と述べている¹⁵⁾。

ここには、再認識派における個物化のプロセスと同様の発想が見られる。再認識派においては、特定化されていない一般的な普遍の顕現 (sāmānyābhāsa) が、特定の時間や空間の顕現と結びつくことによって個物になるのである¹⁶⁾。

5. 36 原理と世界帰滅 既に述べたように、36 原理の階梯は因果関係を本質としている。下位原理は上位原理の結果である。したがって、最終的な結果である下位の原理の原因を探求し、36 原理の階梯を一段階ずつ辿ることによって、シヴァへと至ることが可能になる。シャイヴァ・シッダーンタにおいては、このように 36 原理は論理的側面からも利用される。

しかし、アビナヴァグプタによれば、世界帰滅の過程、言い換えれば解脱の方法は、次のようになる¹⁷⁾。まず対象の根源を探求する。このとき、対象が自らの意識の内に現れたものに過ぎないことを知る。これによって、対象の存在意義は転換する。以前には、輪廻の原因であったものが解脱の手段となるのである。そして対象が認識主体に帰滅したあと、その認識主体が、シヴァ同様に認識と行為を有することを根拠に、シヴァに同定されるのである。それによって、現象世界、認識主体、シヴァの一元化が完成する。ここで重要なことは、探求された対象は上位の原理に還元されるのではなく、認識主体に還元される、ということである。再認識派においては、究極的には、シヴァへ至る道として 36 原理の階梯は不要である。

6. 36 原理と世界創造 アビナヴァグプタにとって、それぞれの原理間の因果関係は構想されたものにすぎない。究極的には、シヴァが原因となり、自主性を通じて 36 原理からなる一切を創造するのである¹⁸⁾。したがって、世界創造の過程において、原理間の因果関係は究極的には必要とされない。

アビナヴァグプタによれば、最高原理であるシヴァは、自らにまず「私」というシャクティの部分を生ぜしめ、その後で、それ以下の原理に自らを分化し、「これ」という現象世界を顕現せしめるのである。世界は、「私」という意識 (ahanā) に相対して「これ」という意識 (idantā) が生じることによって顕現する¹⁹⁾。このような世界創造の理論は、36 原理の体系にも反映される。まずシャクティ原理において「私」という意識が生じる。この段階では、「私」という意識は純粹であり、「私」に対立する「これ」という意識は存在しない。永遠のシヴァの段階ではじめて「これ」という意識が生じる。永遠のシヴァの段階から主宰神原理の段階を経て清浄な知の原理までは、「私」と「これ」の間には、同一性がある。しかしマーヤー原理以下の段階では、「私」と「これ」の間の同一性はなくなり、「私」という意識は認識主体を拠り所とするものとなり、「これ」という意識は認識対象を拠り所とするものになるのである²⁰⁾。

7. 終わりに 「僅かな方法」を体現する再認識派において、36 原理は因果関係を本質とする階梯ではなく、シヴァへ至る道としてはもはや機能しない。そのことは、'adhvan' を「道」と解釈せず、「享受されるべき対象」と解釈することと、シヴァの方法の補助手段あるいは個我の方法として位置づけられていることから明らかである。

ウトパラデーヴァにとって、原理こそがシヴァによって直接的に生み出されるものであり、それら原理を手段として世界の多様な存在が生み出される。そのような原理は、アビナヴァグプタによれば、普遍に等しいものとして解釈される。普遍は多様な存在として展開される。その存在は普遍の混合体である。再認識派において、36 原理は、シャイヴァ・シッダーンタのように階梯としてではなく、多様な存在の根本的要素として再解釈される。解脱のために探求されるべき対象は、上位原理に還元されるのではなく、認識主体に還元されるのである。

1) 再認識派では、プルシャ原理はカウントされるが、プルシャ原理を 36 原理に挙げず、その代わりにグナ原理をたてる場合もある。例えば、『原理綱要』を見よ。 2) この原理は、'sadā-sīva' 「永遠のシヴァ」と解釈されるだけでなく、シヴァ原理と区別され、'sad-ā-sīva' 「有を本質とするわずかに劣るシヴァ」としても解釈される。これは、こ

(238)

シヴァ教再認識派における 36 原理 (川 尻)

の原理よりも上位にシヴァとシャクティという原理があるからである。 3) See TSa28. 4) See TĀ6.30. 5) See MVUT3.20–23. これら三つの手段については高島 [1986]: 「カシミール・シヴァ派における upāya と śaktipāta の体系」(『宗教研究』60 (3): 55–84) 参照。 6) See TTNV, p.319. 7) See TTNV, p.322. 8) この解釈はボージャに言及される。See TP73. 9) See MV on MPA 5.2–3. 10) ŚDV, pp.27–28. 11) Vasudeva [2004: 190, fn.12] において、アビナヴァグプタはこのような原理が世界創造の原因であるという見解に言及しない、と述べられているが、多様な存在として展開されるという形で、世界創造の原因として原理に言及している。 12) See TĀ9.4cd–6cd. Vasudeva [forthcoming] によれば、『マタンガパーラメーシュヴァラーガマ』を根拠とする理由は、その見解がアビナヴァグプタ自身の見解に一致することだけでなく、シャイヴァ・シッダーンタの学匠の間で支配的であったからである。 13) See ĪPVV III, p.264, ĪPV II, p.214, 219. 他学派の見解については、例えばクマーリラを参照せよ。See Ślokavārtika, ākṛtīvāda 3cd. 14) ジャヤラタは、「すべてに展開するもの (tat), すなわち最高の形、その性質が原理である」(tanoti sarvam iti tat param rūpam, tasya bhāvas tattvam) と述べている。すべてに展開する最高の形とは、シヴァに他ならない。原理がシヴァの性質であることが示されている。See TĀV on TĀ9.1. 15) See SvTU4.241–2. またヨーガラージャは、原理に関して、「身体などの一切が展開される場所」(tanyate sarvam tanvādi yatra), 「展開したあと、帰滅に至るまで存在するもの」(tanantāt tat ā pralayam) 「その性質」(tasya bhāvaḥ) という三つの解釈に言及している。See PSV, p.31. 16) これについては川尻 [2006] 「シヴァ教再認識派の svalakṣaṇa 批判——ābhāsanikurumbhātmakasvalakṣaṇavāda——」(『南アジア古典学』1: 109–128) を参照されたい。 17) 再認識派における解脱のプロセス及び再認識の二重性については拙稿「アビナヴァグプタの Īśvarapratyabhijñānākārikā 帰敬偈解釈——「再認識」の二重性について——」(『印度学仏教学研究』52-1: (87)–(89)) を参照されたい。 18) アビナヴァグプタは、因果関係を構想されたものと究極的なものという形で二種類に分ける。See TĀ9.7–8 and TSā, pp.69–70. 19) See ĪPV I, p.1. 20) See ĪPV III.1.3.

〈略号および参考文献〉

Bh: Bhāskarakaṇṭha's *Bhāskarī*, see ĪPV. Dvivedi [1988]: *Aṣṭaprakaraṇa*, ed. Vraj Vallabha Dvivedi, Varanasi: Sampurnananda Sanskrit University, 1988. Goodall et al. [2008]: "A First Edition and Translation of Bhaṭṭa Rāmakaṇṭha's *Tattvatrayanirṇayavivṛti*, a Treatise on Śiva, Souls and Māyā, with Detailed Treatment of Mala." *South Asian Classical Studies* 3: 311–384. ĪPK: Utpaladeva's *Īśvarapratyabhijñānākārikā*, ed. Raffaele Torella, Delhi: Motilal Banarsidass, 2002. ĪPV: Abhinavagupta's *Īśvarapratyabhijñānavimarsinī*, 2 vols., ed. Subramania Iyer and Karti Candra Pandey, Allahabad: The Princess of Wales Sarasvati Bhavana, 1938, 1950, repr. Delhi: Motilal Banarsidass 1986. ĪPVV: Abhinavagupta's *Īśvarapratyabhijñānavivṛtivismarsinī*, 3 vols., ed. Madhusūdan Kaul, Bombay: Nirṇaya Sagar Press 1938–1943. MPĀ: *Mataṅgapārameśvarāgama, vidyāpāda*, ed. Nidḍoḍi Ramcardra Bhatt, Pondicherry: Institut Français d'Indologie, 1977. MV: Rāmakaṇṭha's *Mataṅgavṛtti*, see MPĀ. MVUT: *Mālinīvijayottaratantra*, ed. Madhusūdan Kaul

Shastri, Bombay: Tatva-vivechaka Press, 1922. PS: Abhinavagupta's *Paramārthasāra*, ed. Jagadish Candra Chatterji, Srinagar, 1916. PSV: Yogarāja's *Paramārthasāravivṛti*, see PS. ŚDV: Utpaladeva's *Śivadrṣṭivṛtti*, ed. Madhusūdan Kaul Shastri, Srinagar, 1934. SvTU: Kṣemarāja's *Svacchandatantraudḍyota*, 7 vols., ed. Madhusūdan Kaul Shastri, Bombay: Nirṇaya Sagar Press, 1923. TĀ: Abhinavagupta's *Tantrāloka*, 12 vols. Mukund Ram Shastri (vol.1) and Madhusūdan Kaul Shastri (vols.2–12), Allahabad: Indian Press and Bombay: Nirṇaya Sagar Press, 1918–38. TĀV: Jayaratha's *Tantrālokaivēka*, see TĀ. TP: Bhoja's *Tattvaparakāśa*, see Dvivedi [1988]. TSā: Abhinavagupta's *Tantrasāra*, ed. Mukund Ram Shastri, Bombay: Nirṇaya Sagar Press, 1918. TSa: Sadyojyoti's *Tattvasaṅgraha*, see Dvivedi [1988]. TTNV: Rāmakaṇṭha's *Tattvatraya-nirṇayavivṛtti*, see Goodall et al. [2008]. Vasudeva [2004]: *The Yoga of the Mālinīvijayottara-tantra*, Somdev Vasudeva, Pondicherry: Institut Français de Pondichéry, 2004. Vasudeva [forthcoming]: "Fitness for Experience through Fitness for Awakening: *Bhokṛtva* and *Pramāṭṛbheda* in the *Tattvakrama* of the Trika." *Journal of Indological Studies*. 戸田 [1999]「シヴァ教における三十六原理 (tattva) をめぐる議論」『東洋文化研究所紀要』137: 211–231.

(本研究は平成 23 年度科学研究費補助金 [基盤研究 A] (研究代表者: 丸井浩, 課題番号 23242004) による成果の一部である.)

〈キーワード〉 シャイヴァ・シッダーンタ, 再認識派, 36 原理
(筑紫女学園大学人間文化研究所リサーチアソシエイト, 博士 (文学))

新刊紹介

梶山 雄一 著・吹田 隆道 編

梶山雄一著作集第 3 巻 神変と仏陀観・宇宙論

A5 判・418 頁・本体価格 9,500 円
春秋社・2012 年 12 月